2020 東京オリンピック男子ハンドボール競技の成績と

ゲームパフォーマンス要因との関係

藤川　翔大（201812003、ハンドボールコーチング論）

指導教員：會田 宏、藤本 元、山田 永子

キーワード：選手のプロフィール、シュート成功率、シュートセーブ率

【目的】

2020 東京オリンピックに出場した全 12 か国のプロフィール、攻撃・防御様相、シュートプレーの特徴を上位国、中位国、下位国に分けて明らかにし、それらを日本と比較することを通して、今後日本代表に求められる強化ポイントを明らかにする。

【方法】

本研究では、2021 年に開催された 2020 東京オリンピックの全試合を標本とし、IHF（国際ハンドボール連盟）の 2020 東京オリンピック公式サイトに掲載されている公式記録を分析対象とした。

選手のプロフィールを明らかにするために、名前、ポジション、年齢、身長、体重、国際試合出場数、国際試合得点数の 7 つの項目を分析した。

コートプレーヤーの攻撃の全体像を明らかにするために、ゴール数、シュート数、シュート成功率など 6 項目を分析した。シュートエリアについては、6m、9m、サイド、速攻、ブレイクスルー、7m スロー、エンプティーゴールシュートの 7 つに分けた。また、防御の全体像を明らかにするために、ボールスチール、シュートブロック、イエローカードなど 6 項目を分析した。

ゴールキーパーのシュートセーブの全体像を明らかにするために、被シュート数、被ゴール数、セーブ率の 3 項目を分析した。

上位国、中位国、下位国における平均値の差の検定には、一元配置分散分析を用いた。有意な差が認められた場合、多重比較（Tukey の HSD 法）を行った。有意水準はいずれも 5%で判定した。また、10%未満は傾向差ありと判定した。

【結果】

①コートプレーヤーのプロフィールでは、上位国の年齢、国際試合出場数、国際試合得点数の値が最も高かった（表 1）。日本（11 位）はいずれも上位国および中位国と比べて、また下位国の中でも低かった。

②コートプレーヤーのプレー結果については、上位国のシュート成功率が最も高く、下位国の 2 分間退場が最も多かった。日本はシュート数は高いものの、シュート成功率は上位国、中位国より低かった。

③シュートエリア別のシュートプレー結果については、上位国の 7m スロー成功率が最も高かった。日本はサイドシュート成功率が高く、6m と 9m シュート成功率が低かった。

④ゴールキーパーのプレー結果については、上位国のセーブ数、セーブ率が最も高く、それらは下位国が最も低かった。日本のセーブ率は上位国および中位国と比べて、また下位国の中でも低かった。

【考察】

本研究の結果から、2020 東京オリンピックの上位国は国際試合経験が豊富であるという特徴と、下位国はシュート成功率、シュートセーブ率を上げるような練習をすることが重要であるという課題が示唆された。また、日本の課題として選手一人一人が国際試合経験を積むこと、ミドルおよびロングエリア以外のシュート生起率を高めるような攻撃戦術の準備、ミドルおよびロングシュートにおける技術力の高い選手の育成、6m、9m、7m のシュートセーブ率を高めるようなゴールキーパートレーニング、相手のシュートをサイドシュートで終わらせるような防御戦術の準備が考えられた。

表1　コートプレーヤーのプロフィール

	上位国(1)	中位国(2)	下位国(3)	F値	差	日本
年齢	30.1 ± 5.4	28.1 ± 3.9	28.6 ± 4.2	2.7†	1>2†	27.2
身長	192.0 ± 60.6	188.5 ± 9.0	189.1 ± 6.3	3.6	—	184.8
体重	94.8 ± 9.1	91.9 ± 10.8	94.9 ± 11.0	1.5	—	89.9
国際試合得点数	283.5 ± 284.7	210.9 ± 216.4	187.7 ± 173.8	2.5†	1>3†	129.3
国際試合出場数	127.7 ± 89.6	93.7 ± 82.4	77.3 ± 56.9	5.7*	1>2† 1>3*	53.4

*:p<0.05,†:p<0.1,—:ns